全国同人雑誌評

●**「岩漿」**（静岡県）28号

「岩漿」は静岡県伊東市という伊豆半島に地域を限定されている同人誌のように見えるが、その狭い地域で旺盛な文芸活動を展開している印象がある。「岩漿」は辞書では「マグマ」の意味とあるが、そんな燃え滾る熱さのイメージは確かにある。特に内にエネルギーが向かう耽美的な傾向の作品が多いように感じられる。

「一人静抄」（馬場駿）は双子姉妹の異性への愛情模様がコントラストを強めて描かれている。主軸になる妹が心臓が悪く肉体的に異性との情交が不可能である制約を背負いながらも、経済的には恵まれて、文筆でも収入を得ている、特殊な設定である。健康な姉は性の遍歴に耽る行動派であるところに対照性を帯びたストーリーが展開する。この二人が同時に出版社の編集員を愛することで、さらに愛憎が錯綜する。所々に示される自然描写や気の利いた場面展開は、筆力を感じさせるのだが、やや人工的な色彩が強く、舞台の閉鎖性と重なって、色彩が独りで踊り始める印象がある。双子

という宿命性ももっと生かすことができるはずなのに、彫りが浅い。描写力やストーリーを組立てる力はかなりのものがあるので、自然な素材を選ぶようにすれば、もっといい造形ができるようになると思われる。惜しい力を感じた。

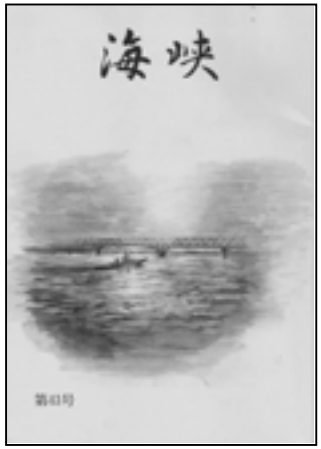
「砂金」（佐木次郎）は、モノローグによってこの傾向をもっと先鋭化した作品で、この徹底した人工性は、怨念の世界を窺わせて、何か大きく潜むものを感じさせる。あまり露骨に表現せず、もっと抑制された方法を用いて力を奥へ貯める方向で描き切ると、優れたものになりそうなパワーを秘めている。注目すべき書き手の様相があるが、読者を意識して自己閉鎖の中に留まらない意志が必要だろう。

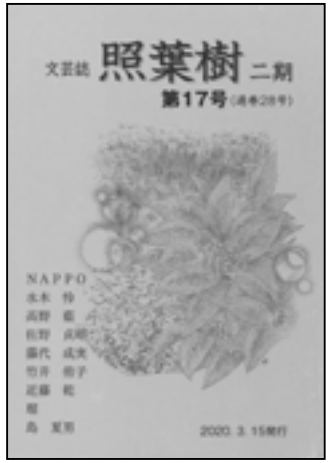
「川面に霧が」（椎葉乙虫）も、自殺した女性の真相を追及する推理小説仕立てで、読ませる作品ではある。しかしこれだけでは、テレビの推理殺人ものとあまり変わらない。人のいい殺される女性の性格のなかに、もう一つ人間性の深い姿を屹立させると純文学になっただろう。

「岩漿」は、地に眠っている力を感じさせる誌で、楽しみだが、作品に柱（ページ上の小さな作品名）を付けたり、目次もメリハリをつけたりする工夫がほしい。各作品も磨きがかかると、より普遍的な力を備えていくだろう。

●**「海峡」**（愛媛県）43号

地道によく文芸の糸を紡いでいる誌で、華やかではないがじっくりした味わいの感じられる毎号だが、今号は藤井総子主宰者の「姉妹」が光った。インターン中の医学生と大学生の姉妹二人で車の運転をして実家に帰る途中、車線を越えて来たトラックと衝突し、妹は片足を切断する。助かったと思われた姉も疲労と妹への負い目から倒れ、脳出血で寝たきりになる。結局姉はそのまま死に、妹はリハビリを経て実家に戻る。姉の部屋で運命を振り返るのだが、全体としていいストーリーで、深いものを感じさせるものの、やや短い感じがする。最後の一行「わたしはこの春、姉が入った大学にチャレンジして、姉と同じように小児科医を目指す予定だ」は唐突で、かえって味消しになる。姉との思い出や、姉が医学を志したきっかけなど、もっと過去の姉妹の触れ合いや人間の存在性を深めれば、さらに充実した作品になっただろう。加筆し、改稿してもらえば推薦作としたい作品だ。





奥付の発行所住所には県名も入れていただきたい。これはすべての同人誌にお願いしたいことだ。

●**「照葉樹」**（福岡県）28号（第二期17号）

「照葉樹」は主宰の水木怜氏がよく引っ張っている情熱の感じられる誌。この号にもますます燃える熱さが備わっている。「やまぶき」（水木怜）は、別府の病院の一人息子が、跡継ぎになるべく医学部受験に何度も挑戦することがストーリーの軸になっている。その間に母が死に、病院も斜陽化して結局継げないのだが、その病院の盛衰の話と並行して、「とみた」という佐伯の老舗旅館の軌跡が重なる。その旅館のおかみが実の母親ではないかと疑う所から、話は複雑化し、人間関係の絡みの糸が奇妙な綾をなすようになる。それらを越えてすべて過去として現在からその模様を振り返るシーンに「やまぶき」が象徴されて、ラストはいい味になっている。ただ、話が錯綜しているので、わかりやすく呈示するのには、それなりの整理の技巧も必要になる。また、この複雑さを人間模様として深く描くには、もっとボリュームも必要だろう。二つの家の流れを書くには数十枚では足りないはずで、推敲の時間もなかったと想われる。逆に時間のない中で、よくこのような題材に挑戦したものだという意欲を買うべきかもしれな

い。雑誌の運営とともに、その点は賞讃したい。

●**「季刊午前」**（福岡県）58号

洗練された読みやすいレイアウトにはいつも感心させられる。誌作りのセンスのよさは抜群である。

今号は「城西支処某重大事件」（木島丈雄）が、読まされた。文章の流れはよく、人物の特徴をよく表しての自衛隊地方支処の事務所内部の活写は生きている。事件は結局無断欠勤とその背後に多額のサラ金借金の事情があり、その不始末を組織としてどう処理したかの経緯なのだが、不思議に引っ張られて読んでいくのは、文章の流れを作るうまさに依っている。しかし読み終わってもう一つ印象が薄く、胸の底にはあまり残らないのは、結局組織の現場を描くことに終始し、人間を掘り下げる刃が鈍いためだろう。自衛隊内部に問題が起こった時の対処の仕方、処分の方法はよくわかり、勉強にはなるのだが、いくら組織内がよくわかっても、人間の行為の印象はない。小説としてはサラ金から借金する原因や過程、その人間に加わってくる圧力やその苦しみを書くべきで、それは置き去りにされたままになっている。筆力はあるので、人間に切り込む力をもっとつけていけば、いい作品が期待できるかもしれない。

●**「法螺」**（大阪府）80号

この号に「終刊のお知らせ」が挟まれていて、さすがに衝撃を受けた。残念である。同人誌を続けることには、人に言えない大きな苦労がある。主宰の西向聡氏には、あらためて称讃を送りたい。巻頭の「さらば法螺よ―枚方文学、花も嵐も半世紀―」を呼んで、胸が熱くなった。ここにある万感の思いは、同人雑誌を運営する者にとってきわめて深い共感があるだろう。後ろに転載させていただく。

この最終号に西向聡氏自身の小説作品「遠雷」がある。旧同僚との再会で、会社を懐古しつつ、内部の抗争がその栄枯盛衰を形作った軌跡を辿りながら、残りの自分たちの人生を見つめて現在の健康や熟年離婚した同僚の状況を思いやる温かいストーリーが流れていく。年を重ねれば普遍的なシーンでありながら、氏独特の人肌のぬくもりが残る佳品になっている。氏の筆はつねに高レベルの出来栄えで、当たりはずれがないほとんどが秀作という見事な安定を示

している。健筆を閉ざすにはまだあまりに旺盛で、今後どこに発表していくのか気がかりではある。

「法螺」には人情味の濃い好エッセイが軒並みで、これだけ人材が揃っているのにと、終刊が信じられないくらいだが、今号でもう一つ特に目を引いたのが「歴史随想　先祖たちの道」（高山順子）である。桑名藩の藩士だった先祖を克明に辿り、地位や報酬などを記しながら当時の生活と幕末の歴史事件を重ねて興味深い歴史生活記録になっている。歴史が生活として浮かんでくるし、逆に地位や藩士の生活を通して歴史が見えてくる。貴重な視点であり、歴史が生きて動いている。なにげない試みであるが、新鮮だった。

●**「海」**（福岡県）90号（第二期23号）

「海」は三重県の「海」と福岡県の「海」の二誌があるが、どちらも力のある書き手が揃っていて、毎号充実している。

今号は有森信二氏の「喫水線」に緊迫感を覚えた。内容は夥しく吐血した父の胃潰瘍手術で一命を取り留める話であるが、生死の境界の切迫感が圧倒的で、最後まで一気に読ませる。大手術を見守る家族の不安と緊張をよく描いていて、ドラマ性が立ち上がった。有森氏にしては文章の緊張感がこれまでになく漲っている。推薦作としたい。

有森氏はこの号に俳句も載せていて、「天上天下」と題した連作は、すばらしい出来栄えである。

「母逝きぬ蟋蟀（こおろぎ）の音のそのままに」
「払暁の電話のベルに風死する」
「夏化粧もの言ふがごと唇光る」
「老鶯のほうほう鳴きて火葬（やき）終わる」
「夏に痩せ焼かれて青き眼窩なり」

●**「こみゅにてい」**（埼玉県）107号

わかりやすく親しみやすくできた作りで、若さも感じられる誌である。この号では「離れ」（春木静哉）に一つの雰囲気を感じた。認知症の母を介護する日常が主軸になっていて、その母親の妄想から出てくる言葉にインパクトがある。「殺すのよ、殺すのはやめにしたのね」「わたし、大学を受けようと思うんだけれどね早稲田と慶應とどっちがいいかしら」前半の淡々とすごい言葉で運ばれる筆致には、つい引きつけられるが、途中から養女として入った家の変遷に入るルーツ語りになり、内容も複雑になって、興味が削がれる。ここはむしろ避けて、認知症に

全国同人雑誌振興会

よるおもしろい言葉とその背後をそのまま探る流れにしていったほうが、小説としては、盛り上がっただろう。物騒な言葉、きてれつな言葉を、現在の心の闇に直截向かう方向でストーリーを組立てていけばずっと豊かな果実を結んだと想われる。後半は、家系の詳細になってしまって、小説的膨らみが失われた。しかし、この作者には簡単な言葉によって、文章を回し、雰囲気を作っていく才能がある。テーマや着地点を見失わなければかっきりした造形ができる力量がある。自分の長所をよく知って、テーマを中心にした生きた造形を心がけてほしい。過去の詳細よりも、大胆なフィクションのほうが、読者の胸を掴むことを知ってもらいたい。準優秀作。

●**「ガランス」**（福岡県）27号

この誌はどれも文章力が高く、話の運び方がうまい。出だしもいい。これは指導者の鍛錬が行き届いているということだと思うが、並々ならぬ教導であることがよく伝わってくる。しかも巻頭から前半は新人によいポジションを提供し、やる気を出させているような配慮も窺える。同人誌のあり方の一つのモデルともいうべき姿が感じられる。

「哀しみよありがとう」（櫻芽生）は、癌で夫を失ってから精神を病むが、夫の足音によく似た盲目の男性を知り、仲良くなって新たな道を歩み始める話だが、ほのぼのとした雰囲気がいい。やわらかく包み込まれるようなタッチの文章が生きている。読後感も快い羽毛で包まれる。最初、サガンの「悲しみよ　こんにちは」とタイトルが似ているので抵抗があったが、読み始めると異なることもわかって読了することができた。もう一つ気になったのは、出てくる人物がみなあまりに善良で、悪い人間や障害になるような人物はだれもいない。世の中こんなにすんなりいかないと思いつつ、なんとなくほだされてしまう、不思議な甘さを持っている。推薦作。

「マルコポーロルージュ」（鈴木比嵯子）も読ませる作品で腕はいい。脳梗塞で倒れた兄をめぐって、いったん母の家に引き取り、その上で離婚した自分、兄嫁、母と、だれがどう面倒を見るかの駆け引きが主軸となる。このやりとりの心理の機微はよく出ていて、おもしろく、確かな技量を感ずるのだが、読み終わって胸に降りるものがやや希薄なのは、肝心の脳梗塞の兄の主体が照射されていないためだろう。「マルコポーロルージュ」は兄嫁が置いていったフランス紅茶の銘柄だが、これがテーマにどう関わるのか、味のようにも映るが結局それほど強く結びついてこないことも覚える。技量はあるので、それに溺れないように足場を固めてみるのも一つのステップかもしれない。

この号には誌名の「ガランス」の由来が「ガランス＝あかね雑考」として創刊号から再掲されていて、たいへん興味深かった。主に「ガランス」という茜色の、当時芸術界で流行したフランス語のニュアンスを追っていて、最後柳田國男の歌「いにしへのあかねむらさきむさしの、跡とふものはただ秋の風」という名歌で閉じているのも秀逸で感心したが、私には広津和郎が「武者小路実篤全集」など出版業を試み、それが関東大震災によって失敗となったという事実が興味深かった。広津和郎は、早くから「出版ジャーナリズムが作家の書く主体性を損ねているので、これを作家の手に戻さねばならない」ことを主張していた。野間宏が「文章入門」のなかでこのことに言及し、私もそれに深く共感して、「文芸思潮」を発行するようになった。広津和郎の主張がこのような出版事業の失敗の上に発せられていることは、ここで初めて知り、大きな勉強になった。

縁は繋がるのか、この号には「全国同人雑誌会議に出席して」という昨年の同人雑誌会議での詳しい報告も載っていた。この末尾に「ガランスの会」の意見と提案もあった。重要であるのでここに記したい。「①『一億総活躍社会』に騙されないこと。物質的には豊かになってきたが、精神生活は逆に貧しく荒廃している。商業主義の渦に巻き込まれない同人雑誌のような創作拠点が重要となってきている。同人雑誌の社会的地位の向上が求められる。②息苦しい社会になればなるほど、創作の場を提供する同人雑誌の役割は大きくなる。『同人雑誌』のキーワードの広がりを期待したい。③全国同人雑誌最優秀賞『まほろば賞』の知名度がさらにあがれば若者、壮年層の同人雑誌への参加が期待できる。（一部省略）」

小河原範夫氏の「月夜に泉のふちで」は力作だが、教団と噴水池との関係がよくわからなかった。ブログでのやりとりなどもおもしろく、筆の吸引力は抜群であるものの、離婚して半世紀前の恋愛の相手に残りの人生を賭けるという着想はやや無理があるかもしれない。準優秀作に留まる。

今回は、優秀作はなく、ややさびしい結果になったが、代わりに周辺に大きな収穫があった。まとめたい。

推薦作

「姉妹」（藤井総子）「海峡」43号

「喫水線」（有森信二）「海」90号（第二期23号）

「哀しみよありがとう」（櫻芽生）「ガランス」27号

準優秀作

「やまぶき」（水木怜）「照葉樹」28号（第二期17号）

「離れ」（春木静哉）「こみゅにてぃ」107号

「月夜に泉のふちで」（小河原範夫）「ガランス」27号

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）

全国同人雑誌振興会